

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	ゆにこーんハート（児童発達支援）		
○保護者評価実施期間	2026年2月5日		2026年2月14日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	19名	(回答者数) 11名
○従業者評価実施期間	2026年2月5日		2026年2月14日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	4名	(回答者数) 4名
○事業者向け自己評価表作成日	2026年3月27日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	子ども一人一人の特性に深く寄り添い、音楽の持つリズムやメロディーを活用し楽しみながら発語やコミュニケーション能力の向上を図る『ことば音楽療法』をメインに学習や訓練への抵抗感を減らし、自然な形で言語発達を促すことができます。	定期的な職員間で支援会議を実施して支援方法の見直しや統一を図っている。心理的ハードルを下げ、意欲を引き出す環境設定、楽しいからやりたいと言う自発的な動機付けを最も大切にしています。一人一人の現在の「できた!」と感ぜられる小さな目標設定を徹底し達成感を即座に共有することで、自己肯定感の向上につなげています。	家庭や保育園、幼稚園との連携を強化し、課題をタイムリーに把握し支援の質の向上を図る。事業所内研修や外部研修への参加を継続し、職員一人ひとりの専門性の向上に努めている。
2	子どもの主体性を大事に、職員間の連携体制とチーム支援	利用児一人ひとりの毎日の支援内容を記録し、職員間で共通理解を持てるようにしている。 定期的な支援会議において支援の方向性を共有・確認している。また、様々な事例に対して複数職員で検討し、チームとして対応している。活動内容に選択肢を設け、子どもが自ら選ぶ機会をつくっている。	支援方法について検討、共有することを継続し、誰が対応しても一定の質が保てる体制づくりを行う。 外部研修の機会を増やし、支援の引き出しを広げるとともに職員の専門性の向上を図る。子どもの意思表示をより支援できるよう、視覚支援やコミュニケーションツールを充実させる。
3	実生活に繋がるSSTの仕組みづくり	「負け方」「譲り合い」「勝ち方」「自分の希望通りにならなかった時」の練習。ゲームやお楽しみを用いたSSTでは勝敗の結果や、「希望が叶わなかった時等気持ちの切り替え方」や「勝った方の表現方法」「意見が食い違った時の相談の仕方」をタイムリーにコーチングすることに取り組んでいます。	場面を想定して予行練習を職員が見せる。「負け時はなんと言うの」等のイメージトレーニングを定例化させる。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	地域とのさらなる連携にむけて	東大阪市のふれあい祭りに年に一度参加しており、日々の療育の中で近隣の商店街での買い物体験を実施している。 施設内活動を優先する中で地域との社会参加の機会はまだ場が限られている状況である	支援の質は維持しながら、地域との繋がりを広げられるよう職員全体で意識して検討していく ゆにこーんぐるーぷのイベントへのお誘いを増やす。 お相撲さんイベントやクリスマス会へのご案内等。
2	情報発信・周知の不足	実施している療育内容や行事、防災訓練等の取り組みについて、保護者へ十分に発信できていない部分がある。また、活動のねらいや意図が具体的に伝えられていない場合もあり、ゆにこーんハートとしての取り組みへの理解を深めてもらうための情報発信が必要である	連絡アプリに加えインスタグラムも活用しながら、活動の様子や療育のねらいを分かりやすく発信することで保護者や地域に向けた情報発信の充実を図る
3	活動スペースの環境整備	棚の上など子どもの手が届く位置に物品がおかれている場合があり、危険につながる可能性がある。活動スペースにおいて、物品の配置や収納場所について安全面を考慮した環境整備を定期的に見直す必要がある。個々の遊びに必要なスペースを職員の声かけて作っている。	子どもの安全を確保するため、落下の可能性のあるものは高所に置いていないか、危険につながる可能性のあるものは子どもの手の届かない場所に収納しているか、定期的に見直しを行う。 パーティションを作ることで個々の遊びに集中できるようにする。